

第二章 原始・古代(考古)

## 第一節 旧石器時代

### 洪積世の環境

旧石器時代とは、地質学上は洪積世こうせきせいと呼ばれる時代にあたり、およそ二、三〇〇万年前から一万年前までのきわめて長い時代である。別名を氷河時代とも呼ばれるように、前後四回にわたる氷河期にみまわれた時代でもあった。氷河期には、気候が極度に寒く、北半球を中心に厚い氷床が発達した。

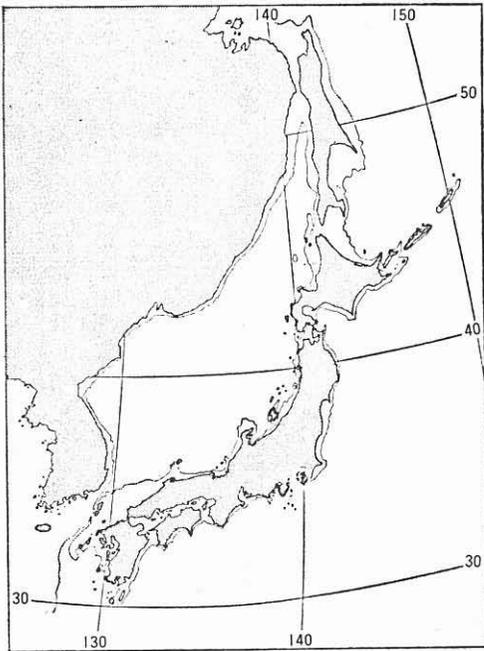


図2-1-1 約2万年前の日本の海岸線(『古代史発掘』1、1974年より)

海水面は著しく低下し、海が干上がった。陸橋ができたりした。一方、氷河期に続く間氷期かんびょうには、気候は温暖となり極地をおおっていた氷が溶け、海へ注ぐため、海水面は上昇していった。氷河期には、陸続きであった海峽域や低地帯は、海水におおわれはじめる。二、三〇〇万年ちかくも続いた洪積世は、このように寒冷な氷河期と温暖な間氷期を繰り返しながら旧石器時代人の生活の舞台となる自然環境を形成していったのである。

今から約二万年ほど前のヴェルム氷期の最も寒冷な時期には、気温は、現在の気温と比較すると、年間の平均で約七度も低かったといわれている。これは、氷河期に堆積した土壌から検出される植物の花粉の分析結果から明らかにされている。この時期の海面低下は、ピークに達し、最も低い海面は、現在の海面よりも一四〇メートルも低かったと推定されている。日本も現在ののような島の形とは異なり、日本海は湖の状態であり、北はシベリア、サハリン(樺太)、北海道が連がり、南も九州、朝鮮半島、中国大陸が陸続きであったと推測されている(図2-1-1)。この寒冷な気候は、そこで生息する動物群や植物にも現在とは違った状況を生み出していたのである。

### 人類の誕生

この洪積世のはじめには、アフリカでは、すでに人類の文化が芽ばえはじめていたことが確認されている。東アフリカのケニヤのルドルフ湖岸のコーピ・フォラ遺跡やタンザニアのオルドバイ峽谷遺跡からは、人類の祖先とみられる猿人化石骨が石器とともに発見されている。猿人にはじまる人類の進化の過程は、いまのところ、猿人、原人、旧人、新人の四つの段階に分けられている。猿人(二、三〇〇万〜六〇万年前)は、アウストラロピテクスと呼ばれており、顔つきは類人猿に似て、口部が突出し、顎が大きく、眉がひさしのようにつき出ている仲間である。脳の容積は、四〇〇〜六〇〇ccでゴリラぐらいしかないが、腰の骨からみて二本足で立って歩いていたことが明らかである。この直立二足歩行こそ人類として進化する大きな要因となるものであった。彼らは歩くことから解放された手によって、石器を作り、それを使うようになった。石器は、河原石を打ち欠いただけの簡単なもの(礫石器)であったが、小型の動物や幼獣を狩って生活していたようである。アジアの地域では、中国南部から発見された元謀人骨がこの時期のものとされるが、詳しいことはわかっていない。つぎの原人(五〇〜四〇万年前)の仲間では、有名なジャワのピテカントロプスや中国の北京原人などをはじめ

第一節 旧石器時代

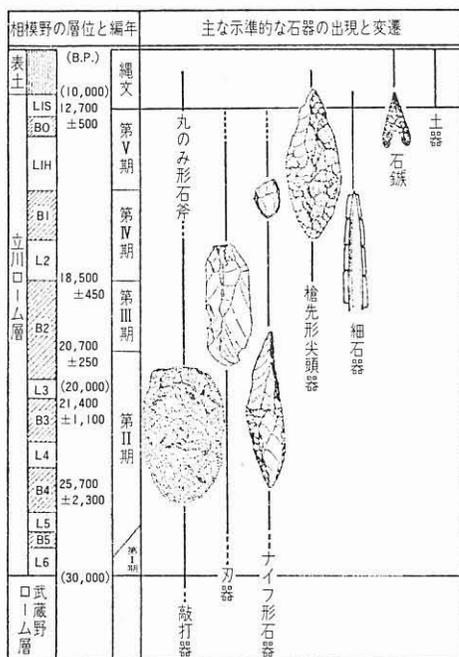


図2-1-2 旧石器時代石器の移りかわり  
 (『日本考古学を学ぶ』  
 (3)1979年より)

らない大きさになった。しかし、眉の突出や額の傾斜は、現代人にみられないくらい強い。彼らは剝片石器をさかんに作り、獣を狩って生活していた。火の使用は一般化し、死者を埋葬する風習があらわれてくる。イラクのシャニダール洞穴では、死者に花を供えて埋葬した形跡がみとめられている。そして最後に登場するのが、現人類の直接の祖先となる新人(ホモ・サピエンス、三万年前)の仲間

ヨーロッパやアフリカから多くの化石骨がみつかっている。猿人に比べて口部はひっこみ、歯や顎も小さく脳の容積も九〇〇〜一〇〇ccでかなり大きくなっている。骨はがんじょうで眉の部分は突き出し、頭が低い。北京原人の発見された周口店<sup>しゅうこうてん</sup>遺跡からは、石器をはじめ、火をたいた跡や大型の動物の骨が多数みつかっている。獣骨のなかには、火をうけたものがあり、炉の中からは炭化した木の実も出ている。石器を使って大型動物を狩ったり、木の実を採集する生活を営み、火を用いて食物を調理したり、暖をとったりすることもしていたことを示している。つぎの旧人(ネアンデルタール人)の仲間は、ヨーロッパ、西アジアからたくさん化石骨が出てくるが、アフリカ、アジアからもみつかっている。ヨーロッパを中心に世界各地に住んでいたことがわかっている。骨はがんじょうで、いかつい顔をしているが、頭骨は、ふくらんで現代人とあまり変わらない大きさになった。しかし、眉の突出や額の傾斜は、現代人にみられないくらい強い。彼らは剝片石器をさかんに作り、獣を狩って生活していた。火の使用は一般化し、死者を埋葬する風習があらわれてくる。イラクのシャニダール洞穴では、死者に花を供えて埋葬した形跡がみとめられている。そして最後に登場するのが、現人類の直接の祖先となる新人(ホモ・サピエンス、三万年前)の仲間

ある。アジア、アフリカ、ヨーロッパはもとより、アメリカ大陸からも化石骨がみついている。骨は、全体にきやしやになり、頭骨は丸くふくらみ、額も真直ぐに立ってくる。歯は小さくなり、口がひっこんで顎が突き出すようになり、眉の部分の突出もなくなってくる。新人は、精巧な石器ばかりでなく、骨や角でつくった道具も使用するようになってきたのである。

このように人類の進化は、大きく四つの段階に分けられているが、人類の進化とともに彼らのあみだした道具も猿人が作った簡単な石器からはじまって、しだいに精巧で複雑なものになっていった。狩りに適した道具、調理に必要な道具といったように長い年月の間に用途にあった道具へと進歩し、石器の種類や形が増えていったのである（図2-1-1-2）。

### 日本の洪積世人骨

日本列島に旧石器時代人が移り住むようになったのは、いまのところ三万年ほど前からのことである。兵庫県明石市でみつかった明石人をはじめ、静岡県で発見された三ヶ日人、

はまきた 浜北人、愛知県の牛川人、うしかわ 沖繩県の港川人、みなとがわ 山下人、大分県のみじりざわ 聖岳人などがある。これらの化石人骨の多くは、骨の保存されやすい石灰岩地帯の岩の裂け目から発見されており、時期などの明らかでないものがあるが、骨の特徴からみて、新人段階のものが多いと推定される。彼らが使用した道具は、石器であった。動物をたおし、皮をはぎ、骨を解体するのもすべて石器を利用した。食料としては、動物のほか、木の実や根茎類も対象となったと思われるが、洪積世末期の寒冷な気候・環境からみて、自然の植物を採集する生活よりも狩猟生活が中心となっていたものと推測される。このころ北海道には、シベリアなどに住んでいたマンモスゾウが、また、本州には、中国北部を中心に棲息したナウマンゾウ、オオツノシカ、ヒョウ、トラ、ヘラシカなど現在の日本にはみられない動物群が棲息していたことがわかっている。長野県の野尻湖底の遺跡では、ナウマンゾウやオオツノシカ

がみつかつていし、岩手県の花泉遺跡<sup>はないずみ</sup>では、オオツノシカ、野牛、ヘラシカなどの骨が大量に堆積した層が発見されている。また、瀬戸内海<sup>せと</sup>の海底や中国山地の遺跡でも、ナウマンゾウ、オオツノシカ、ニホンムカシジカなどの化石骨がみつかつていし。これらの大型動物は、先にのべたように、日本列島がまだ、シベリアや中国大陸と陸続きであったころ、陸橋をつたってやってきたことを物語るものであろう。そして、これらの動物群を追って旧石器時代人も移動してきたものと推測される。

### 旧石器時代遺跡の調査

わが国に旧石器時代の遺跡が存在することが明らかになったのは、戦後の群馬県の岩宿遺跡の発見以後のことである。その後、旧石器時代遺跡の発見は相ついでであり、全

国で二〇〇〇か所以上に及んでいる。広島県内でもいまのところ約二〇か所の遺跡が確かめられている。西中国山地の冠遺跡群<sup>かむり</sup>、頓原遺跡<sup>とんばら</sup>（吉和村）、地宗寺遺跡<sup>じそうじ</sup>（大朝町）や備北地域の帝釈観音堂洞窟遺跡<sup>たいしゃくかんのんどう</sup>（神石町）、下本谷遺跡<sup>しもほんだに</sup>（三次市）、神辺平野周辺の宮脇遺跡<sup>みやわき</sup>、亀山遺跡<sup>かめやま</sup>（神辺町）、西条盆地周辺の西ガガラ遺跡<sup>ひがしふこう</sup>（東広島市）、東深原遺跡<sup>ひがし</sup>（熊野町）などがある。いずれも石器の形態や堆積した火山灰層（始良Tn火山灰層、約二万二〇〇〇〜二万一〇〇〇年前）の年代から二〜三万年前以後の遺跡とみられている。冠遺跡群では、冠山産出の安山岩<sup>あんざんがん</sup>を使用した旧石器の出土地が一〇数か所確認されている。石器群は、各地点により、組みあわせに違いがあり、時代にも差があるようであるが、尖頭器・ナイフ形石器（図2-1-1-3）を中心としており、舟底形石器、楔形石器<sup>くまびがた</sup>、スクレーパー、彫器などが多数出土している。<sup>『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』④、広島県教育委員会、一九八三年。</sup>後期旧石器時代の石器石材の供給地、製作地として注目される。地宗寺遺跡でも丘陵上に堆積した火山灰層（始良Tn火山灰層）の低位からナイフ形石器、楔形石器、石核<sup>せつかく</sup>、剥片などが出土し、下本谷遺跡でも始良Tn火山灰層の下から石器群がみつかつていし。これらの石器群は、後期旧石器時代のナイフ形石器文化期に位置づけられるが、ナイフ形石器でみると、瀬戸内地方の

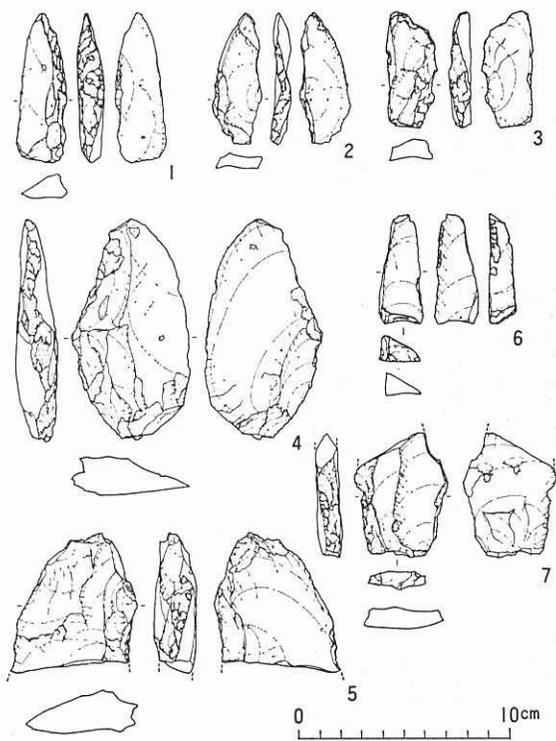


図2-1-3 冠遺跡出土のナイフ形石器（『帝釈峽遺跡群発掘調査室年報』Ⅷ1985年より）

横長剥片剥離技術によるナイフとは異り、縦長剥片剥離技術によることが知られている。また、帝釈馬渡岩陰遺跡（東城町）第五層からは、横剥ぎの刃器、剥片（石器をつくるときに材料となるもの）が出土し、宮脇遺跡（新市町）では、小型の細石刃、細石核（組み合せ石器）がみつかっている。これらは、旧石器時代末期のものとして推定される石器であり、土器出現以前の文化を明らかにするものとして注目さ

れる。さらに帝釈観音堂洞窟遺跡では、洞穴入口部の旧石器時代の堆積層からゾウ、ヒョウなどの絶滅した大型動物の骨とともにシカ、イノシシ、クマ、タヌキ、ノウサギ、ネズミなど中・小型の動物骨が大量に出土しており、あらゆる動物を食料にしていたことがあきらかになっている。河村善也「帝釈観音堂洞窟遺跡出土器類単出土の哺乳動物遺体（その二）」帝釈峽遺跡群発掘調査室年報Ⅷ一九八五年

### 熊野町周辺の旧石器時代遺跡

熊野町周辺の旧石器時代遺跡では、東広島市の西ガガラ遺跡、平木池遺跡、熊野町の東深原遺跡があげられる。西ガガラ遺跡では、丘陵上から後期旧石器時代とみられるナイフ形石器、剥片類が出土しており、熊野町を含む賀茂台地一円では、今からおよそ二万五〇〇



図2-1-4 東深原遺跡（道の向う側の斜面）

○年から二万年前ごろには、人々が生活しはじめたことが明らかである。

東深原遺跡 熊野町大字新宮字深原

東から西へのびる丘陵の西側斜面に位置する。昭和五三年ごろ植栽のため、丘陵斜面を掘り下げた際に、

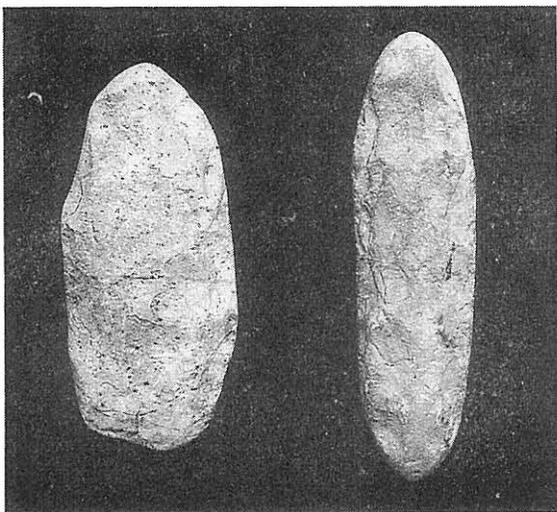


図2-1-5 東深原遺跡出土の局部磨製石斧

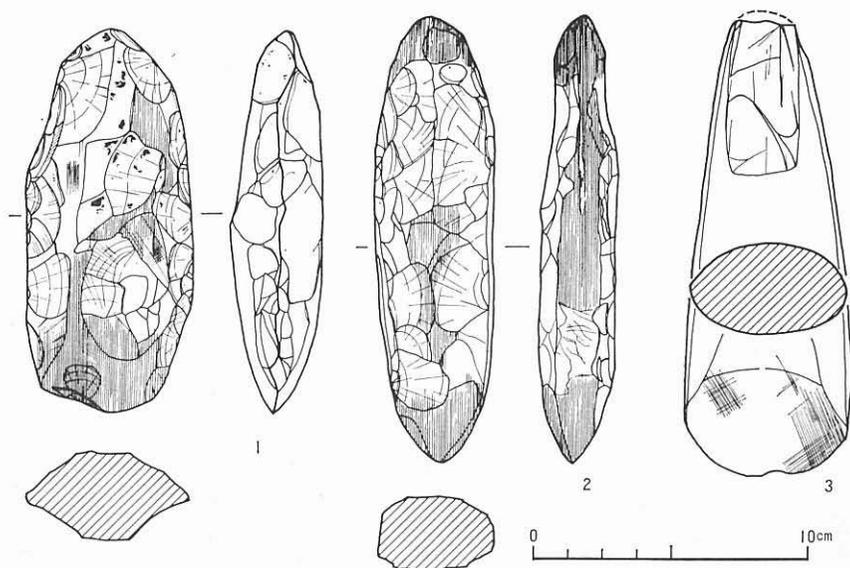


図2-1-6 東深原遺跡出土の石器類(3は縄文時代の石斧)

地表より約五〇センチほど下から局部磨製石斧二点が並んだような状態で出土したといわれている。局部磨製石斧(図2-1-5、6)は、長さ一四・二センチのものと同六・四センチのものがあり、いずれも流紋岩製である。両面とも縁辺部に大きな剝離痕が残り、刃部両面から表裏両面中央部に研磨がほどこされている。局部磨製石斧は、いまのところ広島県では類例がないが、旧石器時代末期の細石器が使われたころに出現する石器といわれる。それまでの打製石器に加えて、石器を研磨する製作方法が出現したことを示し、動物の皮をはいたり、解体する道具に、新たに掘ったり、打ち砕く道具が加わったことをあらわしている。さらに、旧石器時代末期から縄文時代はじめのころには、槍先として使われた有茎尖頭器も出現する。このように旧石器時代末期になると狩猟を中心とする旧石器時代人の生活にも、しだいに変化があらわれてきたことをうかがいしることができる。そしてやがて人々は、石器

を作り、それを使って食物を煮炊きして食べることを、しるようになってくるのである。

第一節 旧石器時代